

富山で
はじめる

SDGs BOOK

誰一人取り残さない
(富山でも…)

協力

- NGO ダイバーシティとやま
- 合同会社 くらし (マチトボクラ)
- 社会福祉法人 黒部社会福祉協議会
- 一般社団法人 立山黒部ジオパーク協会
- 富山県生活協同組合
- 富山市
- 公益財団法人 富山市ファミリーパーク公社
- 南砺市
- 特定非営利活動法人 フードバンクとやま
- YKK 株式会社
- 株式会社 ワールドリーデザイン



発行 平成 31 年 3 月

一般社団法人 環境市民プラットフォームとやま (PECとやま)
〒939-2702 富山市婦中町田島 854-3 TEL:076-400-8305
E-mail:info@pectoyama.org <https://www.pectoyama.org> f t i

この冊子は、アースデイとやま実行委員会の協力の下、環境再生保全機構地球環境基金の助成により作成しました。



富山で
はじめる

SDGs BOOK



Contents - もくじ -

● SDGsとは	3
● 富山県内のSDGs取り組み事例	6
① NGO ダイバーシティとやま	6
② 黒部市社会福祉協議会	8
③ シェアハウス「マチトボクラ」	10
④ 立山黒部ジオパーク	12
⑤ 富山県生活協同組合	14
⑥ 富山市ファミリーパーク	16
⑦ 南砺市	18
⑧ フードバンクとやま	20
⑨ YKK 株式会社	22
● SDGs未来都市 富山市	24
● SDGs 達成に向けて	26
● ライター紹介／編集後記	27

富山ではじめる SDGs

SDGsとは何か？私たちの暮らしとどのような関係があるのか？
2019年3月9日サンシップとやまで開催された「富山ではじめるSDGs フォーラム」の内容から紹介します。

SDGsとは？

SDGs（エス・ディー・ジーズ：持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals）とは、「2030年までに世界中のあらゆる人々が力を合わせて持続可能な世界を実現しよう」という目標のことで、2015年に日本を含む国連193か国の合意により作られました。「人間」「繁栄」「地球」「平和」「協働」を大切にする17の目標と169のターゲットで構成されています。近年、貧困や地球温暖化などの世界的課題は互いに複雑に絡み合い深刻化しており、このまま放置すると地球の存続さえ危うい状況だとされています。SDGsは、これらの総合的な解決を目指して、「誰一人取り残さない」という強い決意の下、地球に住む私たち一人ひとりの協力が求められている世界共通の目標です。（川嶋直さんの講演より）



紙芝居プレゼンテーション（KP法）をする講師の川嶋直さん



川嶋さんの紙芝居プレゼン用紙

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標





SDGs 認知度についてグーチャョキパー調査



2人目の講師、藤田香さん



パネリストの伊藤大樹さん、田辺和寛さん、田中美弥さん



パネリストの加藤愛理子さん

私たちの暮らしと SDGs

富山のおいしい魚。これからもずっと食べ続けられるでしょうか。世界的には海洋資源減少の懸念もあります。日常的に購入している品物の出どころを辿ると、産地の資源枯渇や環境破壊、児童労働などの人権侵害などにもつながっているかもしれません。自分たちの足元だけでなく、他の地域、他の人、次の世代のことも考えることが必要になっています。一方、SDGsによる経済効果も期待されています。投資家・金融機関が「責任ある投資」として、SDGsを取り入れる街や企業に投資をする「ESG投資」が活発化しています。私たちの住む街、勤める会社がSDGsを取り入れれば経済的にも有利になるということです。「持続可能な街、暮らしをつくること」、これが私たちに一番近なSDGsへの取り組みです。（藤田香さんの講演より）

SDGsに取り組むポイント

これまでのライフスタイルや価値観から変化を起こすためには、次の3つの視点が重要です。

- ①逆算志向（アウトサイドイン／バックキャスト）：今できることから考えるのではなく、地球の課題や達成したい未来像から解決するための仕組み、技術、発想を創り出していく。
- ②変革（トランスフォーメーション）：大量生産と大量消費から全く新しい仕組みやビジネスのあり方、ライフスタイルを創る。
- ③協働（パートナーシップ）：複合的な課題への解決が求められているので、政府、企業、学校、NPOなど分野・領域を超えた様々な協働体制が必要。それにより変革も起こりやすくなる。（藤田香さんの講演より）

今こそ行動の時

一人一人の行動が求められるSDGs。フォーラム当日、講師やパネリストから挙げたキーワードを紹介します。小さなことをやってみると変わる／まず行動を起こすこと、最初の一步は100歩分／ひとつの熱意が渦を作って、いろんなひとを巻き込んでいく／その時に応じた最適な人達とやっていくのが大事／お金の使い道が大切。どこで、だれから買うのか／みんなちがってみんないい。相手の意見を認めることから始まる／個として立ち、やってしまう。そうすると、集まるべくして集まる仲間巡り合う／お金がなくてもできる。お金がなかったらどうやってやるか、知恵を出し合えばいい／やりたいことをやる、というのが重要。今やりたいことは、SDGのどこかの目標に繋がっている。会社でやりたいことを手を挙げてやると、お金や人は後から付いてくる。パートナーシップがどんどん増えていく。



大喜利パネルディスカッションの様子



小学生からの意見発表

富山ではじめる SDGs フォーラム

講師・パネリスト紹介



パネリスト

伊藤 大樹 さん

シェアハウス「マチトボクラ」オーナー
まちは第3の家族。住むことで関わり合い、成長し合う。



パネリスト

田中 美弥 さん

野菜ソムリエ上級プロ／
富がえりのレシピ実行委員長
野菜の力を通して、食文化と健康、
つくる人・食べる人をつなぐ。



パネリスト

加藤 愛理子 さん

「みやの森カフェ」オーナー／Ponteとやま理事
高齢や障がいなど、生きづらさを感じる人たち
と作るごちゃまぜな居場所。



パネリスト

田辺 和寛 さん

「HOTORI × ほとり座」オーナー
何が豊かか幸せか？暮らしの中の
クリエイティブな思考が、地域を変える。



講師 パネリスト

藤田 香 さん

日経BP社 日経ESG編集 シニアエディター &
日経ESG経営フォーラム プロデューサー
富山大学客員教授



講師 ファシリテーター

川嶋 直 さん

公益社団法人日本環境教育フォーラム理事長
立教大学ESD研究所客員研究員

NGO ダイバーシティとやま



〒939-0362 射水市太閤山 7-25 E-mail:diversity.t@gmail.com <http://diversity-toyama.org/>



主催している世界自閉症啓発デー五箇山管沼 LIUB

ちがって当たり前、 ちがうから活かしかえる

富山県内で数少ない日本語学校、NPO 法人富山国際学院に、宮田妙子理事長をお訪ねしました。宮田さんは、日本にきた外国人が大学や専門学校で学べるように日本語を教える傍ら、もう一つの活動をされています。今日はその NGO ダイバーシティとやまの活動を中心にお話を伺いました。



左から宮田理事長、筆者江川

“ドリブラ”から生まれた「ダイバーシティとやま」

NGO ダイバーシティとやまは国籍や年齢、障害など、いろいろある「ちがい」を活かして一人一人が活躍できる社会の実現をめざし、人の多様性（＝ダイバーシティ）に配慮した「しなやかな地域づくり」を提案しています。

宮田さんがこの活動を行うきっかけとなったのは、2011 年 8 月に富山で開催された「ドリームプラン・プレゼンテーション（ドリブラ）」で 10 分間の「夢」の発表を行ったとき、応援メッセージを 400 枚ももらって勇気付けられたことです。これがきっかけで、以前から考えていた多文化共生ダイバーシティという夢への行動につながったと言います。

宮田さんは、自身の日本語教師としての経験から、これまで外国人学生の教育や生活上の悩みなどに寄り添ってきました。またボランティアとして外国人の小中学生とも向き合い、「外国人が日本に住む」ことの難しさを目の当たりにしてきました。このことを多くの人に伝え、「多様な違いで対立するのではなく、認め合い活かしかう社会を実現したい」と考えています。

日本の未来を共に担う仲間として

2018 年 12 月、改正入管難民法が成立し、外国人労働者の新たな在留資格が創設されました。日本の貴重な労働力として外国人への期待が高まっていますが、一時的な労働力としてではなく、日本の未来を共に担う仲間なのだという意識を持つことが大切です。

こうした外国人労働者やその家族を取り巻く状況にどう対応していけばいいのか、「富山県外国人材活躍・多文化共生推進プラン策定委員会」が開催され、宮田さんも委員の一人として、日々多くの外国人と接している立場から意見を届けています。



上：多文化共生ワークショップ
中：ごちゃまぜキャンプ
下：臨床美術ワークショップ

SDGs × ダイバーシティとやま

SDGs の「誰一人取り残さない社会の実現」は、まさに「ダイバーシティとやま」が行っている「違いを活かしたしなやかな地域の実現」と似ています。「ちがい」があるから悪いのではなく、「ちがい」こそ力になるのです。多様性を認める「ダイバーシティ視点」で、共生していくことが大切です。

これらは SDGs では、10 番「人や国の不平等をなくそう」、11 番「住み続ける街づくりを」、16 番「平和と公正をすべての人に」に相当すると感じました。多様な文化・違いを受け入れ共生できることが普通の世の中になるのが、「ダイバーシティとやま」が望む姿だと思いました。
(江川竜平：記)

黒部市社会福祉協議会

〒938-0022 黒部市金屋 464-1 TEL:0765-54-1082 <https://www.kurobesw.com>地域に合った SDGs で
地域からつくる “しあわせ・豊かさ”

「社会福祉協議会ってなんだろう？」何を目指してどんな活動をしているのか、地域福祉の現在を具体的にお聞きしたく、黒部市社会福祉協議会の経営戦略係長・小柴徳明さんをお訪ねしました。小柴さんは、地域に飛び込んで幅広く活動されています。



黒部の福祉を良くする活動計画「5 GOALS for 黒部」



左から小柴係長、筆者江川

協議会は、みんなのしあわせを話し合う場

「福祉と言われて何を思い浮かべますか？」と、小柴さんから逆に質問されました。「介護、医療…」など思い浮かべるとありますが、実は「しあわせ・豊かさ」を表現する言葉なんです。つまりですね、黒部市社会福祉協議会とは「黒部市民のみなさんをしあわせにするために話し合う場」という意味になります。」

小柴さんはみんなのしあわせのために、ヒト・モノ・カネを効果的に活かすことが必要であり、そのためには中長期スパンで時代の情勢をとらえた地域福祉ビジョンを共有して、「みんなのしあわせ」の実現を目指したいと話しました。

社会福祉協議会は社会福祉法により、地域福祉の推進を図る中核的団体として各自治体に設置されています。

計画は地域みんなで、若者も加わって

黒部市社会福祉協議会では、主に地域福祉の推進、ボランティア活動の推進、在宅福祉サービスの推進、社協活動の充実・強化の4つの活動を行い、地域社会が豊かになるようにと活動しています。

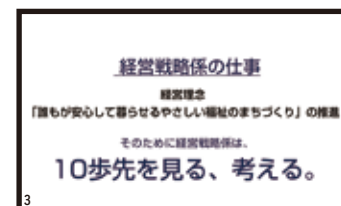
特に小柴さんは、「誰もが安心して暮らせるやさしい福祉のまちづくり」の推進を担っています。その推進において10歩（10年）先を見据え・考えて、バックキャストで計画を立てるなどを実践しています。それらに加えて、小柴さんがこだわっていることは「持続可能な地域」を実現することです。何かを企画し、決定する場合、一部の人たちだけで話し合っているのはすべての人たちに根ざした計画にはなり得ません。そのために、幅広い年代や男女を混ぜて会議を行う工夫をしています。つまり、地域により若い人の力を取り入れることや多様性を大切に考えています。

黒部に合った、黒部のためのSDGs！

黒部市社会福祉協議会では、より地域に根ざした活動計画を作成するためにSDGsのゴールとターゲットを参考にしています。それに加えて、ただ国連のものをそのまま活動計画に取り入れるのではなく、日頃の調査やオープンデータなどのデータベースを用いて、民間の福祉団体や企業、NPOや市民の参画と協働で、黒部をしあわせにするための地域に合ったシンプルな計画『黒部の福祉を良くする活動計画』ができました。それが、『5GOALS for 黒部』です。1「活動人口を増やそう」2「話すことから始めよう」3「すべての人に福祉を」4「U-40世代の力を活かそう」5「パートナーシップで目標を達成しよう」といった「黒部のためのSDGs」ができています。

世界を変えるには、初めから世界全体を変えることを意識するのではなく、地域、市、県、国といった小さな場所からこつこつしあわせにすることが、世界を変える大きな力になると思いました。

（江川竜平：記）



1：策定委員会をつくって議論
2：今までは違う計画づくり
3：経営戦略係の仕事
4：策定に関わった多様な黒部の市民

シェアハウス「マチトボクラ」

〒930-0072 富山市桃井町1丁目1-2 E-mail:info@kurasi.me http://kurasi.me https://www.machiboku.com



富山の中心部から生まれる 『若者 × 地域住民』のコミュニティ

若者を中心に利活用が広がっているシェアハウス。「マチトボクラ（通称マチボク）」のオーナーを務める伊藤大樹さんにお話をお聞きました。



マチトボクラを埋め尽くした【学生プロハナイト in TOYAMA】



取材中の伊藤大樹さんと筆者黒瀧

まちなかで、街の人との交流を

「マチボク」は富山市中心部に位置する若者世代に向けたコミュニティハウスで、古い家を活用した1号館と2号館、11月には3号館もでき、富山県内の大学に通う学生が住んでいます。平日の夜や休日には、持ち寄りご飯会や街の人を呼んでの座談会など、交流スペースは気楽に集えるイベントで賑わいます。

伊藤さんは普段、東京の大学に通いながら、「マチボク」の管理やイベント開催に携わるために、ひと月の3分の1は富山に戻ります。「マチボク」の管理運営や地域振興事業を通して、人と人との繋がりが豊かなくらしを提供することを目指す「合同会社くらし」の代表を務めています。

「マチボク」誕生の背景

もともと転勤族で引越しの頻度が高かった伊藤さんは、引越しによる友人関係の不安など子どもながらに生きづらさを抱えていたこともあり、「家族以外の人とのつながりを持ちたい」と強く思っていました。高専時代、県内の商店街を対象に短期間のセレクトショップを開く活動をしていたとき、伊藤さんや学生たちは、商店街の方たちとの交流にとても温かいものを感じ、地域の温もりを意識するようになりました。これが、「マチボク」誕生のきっかけとなりました。

「マチボク」に対する想いを伊藤さんはこのように語ります。「何もない時にこそ、話せる人たち。それは僕にとって『豊かな暮らしを支える大切な要因の一つ』だと感じています。そんな『ゆるいつながり』をどのように増やしていくか、考えていきたいと思います」。

親戚みたいな街の温もりを

伊藤さん本人はSDGsの活動に取り組んでいると公言しているわけではないのですが、今回の取材を進めていくうちに、伊藤さんが取り組む「人と人とのつながりによる豊かな暮らしの提供」はSDGsの11番「住み続けられるまちづくり」につながるものと確信しました。

「僕が目指しているのは、誰が、どこに住んだとしても『親戚みたい』とまで思えるような人間関係を築けること。街の人と関わり続けられる場所と仕組みを作りたいと思っています。これまで家族以外の人との関わりが少なかった分、それが楽しいですね」。伊藤さんのシェアハウスには、そんな熱い想いがいっぱい盛り込まれています。2030年に向け、様々な人がお互いに支えあって生活を送れるような居住空間・社会の実現につながるのではないのでしょうか。
(黒瀧春香：記)



上：餃子を500個も作った（ご飯会）
中：社会人先輩の話を聞いた（マチボクヒロバ）
下：みんなでカレー（ご飯会）

立山黒部ジオパーク

〒930-0856 富山市牛島新町 5-5 タワー111 ビル1階 TEL:076-431-2089 <https://tatekuro.jp/>

標高 3,003m の立山（雄山）から水深 1,000m の富山湾を望む

高低差4,000mの大地と水の巡り 多様な自然と文化を未来へつなぐ

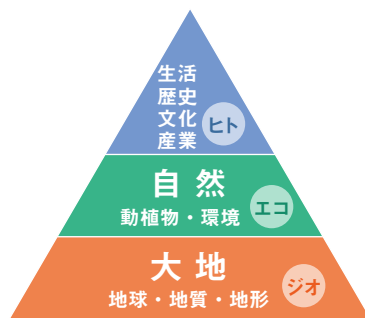
「立山黒部ジオパーク」は、高低差 4000m、38 億年の大地の歴史にふれる、スケールの大きな自然公園です。立山黒部ジオパーク協会では、その環境保全を中心としたSDGsに関わる取り組みを行っています。今回、事務局長・今堀喜一さんと事務局次長・小谷智志さんにお話を伺いました。



左から今堀事務局長、小谷事務局次長、筆者伊藤

地域でつくり上げる「ジオパーク」

「ジオパーク」というのはユネスコの事業の一つで、「地質遺産」をメインに自然や景観を保全しながら、その地域資源を持続するために、教育や観光、防災などに活用し、地域が主体的に取り組むという、いわば「地域でつくり上げる自然公園」です。従来から選定が進められてきた「世界遺産」には、「地質遺産」があまり含まれていないという背景があり、その重要性に注目して、近年になって「ジオパーク」の取り組みが始まりました。国内には、日本ジオパークは現在 44 地域（うち9地域は世界ジオパークにも認定）もあり、「立山黒部ジオパーク」は富山県内唯一の認定地域です。



ジオパークの概念

実感！地球とともに生きている！

立山黒部ジオパークでは、地形の成り立ちやダイナミック水循環を生む自然環境をメインの素材として、教育やツアーに活用しています。埋没林や氷河などジオパークを構成する特徴あるサイトや施設などへの見学体験ツアーを通して、自然への理解を深め、広く保全する活動へとつなげていきます。現在、観光会社とも連携し、地元で養成したジオガイドが活躍する観光事業「ジオツアー」に力を入れています。実際いくつかの団体から申し込みが来ていましたが、まだまだ「ジオパーク」の認知度が低いことが課題であり、ジオガイドが企画した「ジオパーク散歩」などの気軽に参加できる催しや自治体や専門家の協力を得たシンポジウムなど、様々な啓発活動も行っています。

上：滑川・上市サイクリングツアー（ジオめぐり・グルメめぐり）
下：博物館でのブース出展「石の釣り堀り」

パートナーシップで保全と活用を

ジオパークは、地質遺産やそれに関連する自然遺産、文化遺産を保全し、持続可能な地域を実現させることを目指しています。これは、まさに SDGs（持続可能な開発目標）に合致している取り組みです。また、ユネスコ世界ジオパークの歴史自体が新しい中で、遺産の学術的価値を観光や防災などに活用しながら、いかに多くの人に認知してもらうのが重要な課題の一つであり、持続可能な地球の未来に向けた SDGs の担い手育成に意欲的に取り組む事業としても、位置付けられます。

また地域に根ざし、地域をつなぐという観点からも、SDGs と「地域」との関係を深める重要な枠組でもあり、大学等を含めた地元との「パートナーシップ」が大事だと思いました。これからの活動に注目です。（伊藤拓也：記）

富山県生活協同組合



〒930-0873 富山市金屋 555 TEL:076-443-8800 (代) <https://www.toyamaken-coop.or.jp>



SDGsと富山県生協の取り組みを紹介した「けんせいきょう祭り 2018」

心豊かなくらしと共生社会を 協同の力（パートナーシップ）で

富山県生活協同組合（以下、富山県生協）とは、消費者が力を合わせて自分たちの「暮らしと健康を守り向上させる」ことを目的とした組織です。富山県生協では、個人宅配・共同購入を中心に、共済事業・夕食宅配・灯油事業・福祉事業など幅広い事業や、組合員と共に活動を行っています。事業支援本部長・澤田高秀さんと、組織ネットワーク部次長・森内紀之さんに、富山県生協とSDGsの関わりについて伺いました。



右から澤田本部長、森内次長、筆者加藤

富山県生協とSDGsは深い関係？

富山県生協は事業自体が幅広い分野に渡るということもあり、事業や活動内容を聞けば聞くほどSDGsの17項目すべてに関連していることに驚きました。中でも特に3「すべての人に健康と福祉を」、12「つくる責任つかう責任」に深く関わっていると感じました。私は今一人暮らしをしていますが、毎日夕食を作る時間はありません。県生協の夕食宅配は栄養バランスをしっかりと考えて作られていて、私も利用したいと思うほどです。この事業が広まれば、SDGsの3「すべての人に健康と福祉を」の達成にも近づくと思います。

「けんせいきょう祭り」でも積極的に

毎年、富山県生協主催で行っている「けんせいきょう祭り」では、取り組みを始めたSDGsについて紹介し、組合員や多くの県民の方に理解を広める努力をしています。さらに最近は食品ロスを減らす活動にも力を入れているそうで、家庭で余っている食べ物を持ち寄り、地域の福祉施設などにフードバンクとやまを通して寄付する「フードドライブ」活動を行い、2日間で75.3kgの食品を集めることができたそうです。このことから17「パートナーシップで目標を達成しよう」にもチャレンジされていることが分かりました。来年以降も継続的に続けていくということです。私自身、富山県生協がここまでSDGsに深く関わっているとは思っていませんでした。

広げていきたい、助け合いの輪

今回の取材で「大事なことは今のまま続けていく」という言葉が一番心に残っています。組合員や地域の方々から本当に必要とされている事業だからこそ、この言葉が出てくると感じました。私自身も学生生活協同組合の組合員として大学で活動していますが、やはり生活協同組合は組合員一人ひとりの力で成り立っているの、どこか「あたたかい組織」だと感じました。これからも様々な事業・活動を通して「助け合いの輪」を広げていってみたいです。（加藤哲朗：記）



上：注目を集めた、会場入口のディスプレイ
中：フードバンクとやまとの協力で実施したフードドライブ
下：翌日の配送に向け準備される、多様な品々

富山市ファミリーパーク

〒930-0151 富山市古沢 254 番地 TEL:076-434-1234 <http://www.toyama-familypark.jp>

左：乗鞍岳で採取された有精卵から孵化した 11 ヶ月のオス 右：孵化後、2 週間のヒナ

身近な自然環境に気づき、
生物多様性が保たれるように

富山市ファミリーパークは飼育動物数がおおよそ 100 種 1,000 点にもなる動物園で、遊園地やバーベキュー場も併設されています。現在富山市ファミリーパークでは、ニホンライチョウの保全を通して、SDGs に取り組んでいます。園長の石原祐司さんにお話を伺いました。



園長の石原祐司さん

ライチョウの生息のために

富山市ファミリーパークがいま、力を入れて取り組んでいるのは、ニホンライチョウの飼育・繁殖技術の確立です。ニホンライチョウは、高山に生息する特別天然記念物に指定されている鳥で、絶滅危惧種でもあります。夏と冬で羽毛の色が違い、冬のライチョウは真っ白できれいでした。富山市ファミリーパークでは、絶滅が危ぶまれるライチョウを安定的に生息させていくために、SDGs の Goal 15「陸の豊かさを守ろう」に取り組んでいるところです。

繁殖技術の確立にチャレンジ

最終的な目標として、ライチョウが自然環境で安定して生息できることを目指しています。そのために取り組んでいるのが、ニホンライチョウの飼育・繁殖技術の確立です。現在はわからないことが多く、スバルライチョウなど近縁種のライチョウの繁殖技術を元に、ニホンライチョウの飼育・繁殖技術を手探りで模索している最中です。

ニホンライチョウは自然界では卵を 7 個ほどしか産みませんが、初年度飼育しているニホンライチョウは卵を 20 個も産んだそうです。動物園では十分なエサがもらえるからか、逆に安心できないから多くの卵を産んだのか、原因はわかりません。そこで、その次の年ではケージを使って、ニホンライチョウの巣を用意しました。単にケージを置くのではなく、木の葉や草などで生息環境を演出したところ、卵の数が 11 個にまで減ったそうです。このように手探りでも着実に、飼育・繁殖技術の確立に向かって進んでいます。

高山に戻って生き続けられるように

現在は主に獣医 2 人を含む計 7 人でライチョウの飼育を行っているそうです。飼育している施設は、衛生管理を厳重にしています。平地では、高山帯に存在しない細菌が多く存在するため、それらの菌からライチョウを守るためです。また、エサは主にウサギ用の固型飼料と小松菜を与えていますが、それに加えてビルベリー（ブルーベリーの仲間）の枝葉を与えています。これはライチョウが高山帯で食べている植物に近い種類の植物で、動物のエサは自然の中で食べているものに近いものがないためです。さらに、施設内の電気も太陽の日照時間に合わせて消灯するなどライチョウの飼育環境は徹底されています。（蟹谷 慧：記）



上：ニホンライチョウの人工飼育・繁殖に取り組むライチョウ舎
中：飼育に取り組む獣医師さん(中央)と。右は園長、左は筆者
下：2019 年 3 月、初の展示公開でにぎわうライチョウ舎

南砺市

市民協働部エコビレッジ推進課 〒932-0292 南砺市井波 520 TEL:0763-23-2050 <http://www.city.nanto.toyama.jp>



「南砺市エコビレッジ構想」を基盤に 持続可能なコミュニティづくり



エコビレッジ構想モデルエリアの桜ヶ池周辺

南砺市では、国の「SDGs 未来都市」選定に向け、熱心に SDGs の取り組みが進められています。南砺市井波庁舎を訪ね、エコビレッジ推進課寺田俊一係長と藤田智晃主査にお話を伺いました。



左から、藤田主査、寺田係長、筆者伊藤

小さな循環による地域デザイン

リーマンショックや東日本大震災などから、南砺市は多くを学び、未来に向けた地域づくりのあり方を示す「南砺市エコビレッジ構想」を立ち上げました。経済・社会・環境の3分野が様々な形で関わり合い、木材をはじめ自然・人・経済・情報などが循環することで「持続可能」な地域を創り上げることを目指しています。

現在、桜ヶ池地区をモデルとして、「小さな循環による地域デザイン」という基本理念のもと、地域資源の循環と地域の自立をめざす様々な事業を行っています。

豊かな森からエネルギー循環システム

南砺市面積の約 80%は森林です。この豊富な資源の有効活用を目指して取り組んだのが、木質資源の循環を図るエネルギーシステムの構築です。

建築資材等で余った木材やオガ粉などを小粒の固形燃料にした「木質ペレット」はとても運びやすく、プールや温泉、さらに住宅でも、ボイラーやストーブに燃料として手軽に使用でき

ます。実際に南砺中央病院やゆ〜ゆーランド花椿、福光ブルーなどの施設で6台のペレットボイラーが稼働しており、石油燃料に比べて年間1,965トンの二酸化炭素を削減しています。

さらに、ボイラーから出る燃焼灰は農業用の肥料としても活用され、より先進的な充実した循環システムとなっています。

あらゆる視点で、持続可能に

この他に、木質発酵熱を利用したビニールハウス農業や、地域内でも介護に取り組む地域包括ケアシステム、合掌造りを再生するプロジェクトなど様々な事業に取り組んでおり、映像や音楽などで活動を発信しています。さらに、コミュニティファンドで地域の資金を循環し、地域が自立できる小規模多機能自治の取り組みも意欲的に進めています。

「南砺市エコビレッジ構想」は、まさに SDGs＝持続可能な開発目標に合致した構想として「SDGs 南砺版地域循環共生圏」へと進化しており、地域や自治体による SDGs の取り組みモデルとして、今後ますます目が離せません。（伊藤拓也：記）



南砺市が目指す SDGs 未来都市【南砺版地域循環共生圏】

フードバンクとやま

〒939-0256 射水市広上 1159 TEL:090-1393-5619 <http://www.foodbank-toyama.com>

もったいないをつなげよう 食を大切にしよう



福祉施設の方々の協力で、防災備蓄品の分配作業

フードバンクとやまの食品ロスを減らす活動は、どのようにSDGsに関わっているのでしょうか。フードバンクとやま代表の川口明美さんにお話を伺いました。



取材を受ける川口代表

作る人と食べる人が1歩ずつ近づく

日本では年間 646 万トンの食品ロス（※1）が発生しているといえます。つまり、日本国民が1日にご飯茶碗1杯分を捨てているということになります。そんな現状に心を痛め、「なんかせんなん」（富山弁：何かしなくては）と立ち上がったのが川口さんです。

もともと「環境問題」と「福祉の問題」が気になりつつも、「自分に何ができるか」と日々悩んでいた川口さんは、ある日テレビで「セカンドハーベスト・ジャパン」（※2）を知ります。「これなら自分にもできる！」と始めたのが、フードバンクとやまの活動でした。

川口さんは「作る人と食べる人の間の距離が遠すぎる。それぞれが1歩ずつ近づくことが大切」と話し、フードバンクとやまの活動を通してその距離を近づけ、食べ物を作る側の責任・大切にいただく側の責任にも気づいてもらえるようにと願っています。

ロスを減らして、必要な人たちに

現在フードバンクとやまでは、賞味期限が近づいて捨てられてしまう食べ物を無償で提供してもらい、生活困窮世帯などの支援を必要とする人たちに運んで有効に活用してもらう活動をしています。具体的には「日持ちするもの（お菓子、防災備蓄品、お米など）」は個人を支援している団体へ、「日持ちしないもの（パン、野菜など）」は提供してもらった場所から一番近い施設へ送っています。昨年（2017年）1年間で分配した食品の重さは、7.6トンにもなりました。

フードバンクとSDGsの関わり

SDGsの1.「貧困をなくそう」、2.「飢餓をゼロに」の2つが、フードバンク活動の目標とされますが、フードバンクとやまでは4.「質の高い教育をみんなに」、17.「パートナーシップで目標を達成しよう」も大切に活動しています。4の「質の高い教育」は貧困が原因で教育を受けられない、そして安定した仕事に就くことが難しいという負の連鎖を断ち切ることを目標にしています。17に関しては、フードバンクは立場を超えた多くの人からの協力で成り立っています。企業や組合など様々な場所で、食品ロス削減に関わるセミナーも行っています。

食を大切にする気持ち

「食を大事にする気持ちを持ってほしい」と川口さんはいます。食品を受け取って配るだけでも、食の大切さを実感することができるので、是非みなさんもフードバンクとやまの活動に参加してみてください。きっと食に対する見方が変わるはずです。この活動に賛同してくれるボランティアも募集しています。（加藤哲朗：記）



上：母子家庭支援団体へ食品の寄付
中：お届けした防災備蓄品やパン
下：とやま環境フェアにも出展

※1…「平成27年度の食品廃棄物等及び食品ロス量」農林水産省と環境省による推計結果より

※2…セカンドハーベスト・ジャパンは、食品関連企業や個人から、まだ安全であるにもかかわらず、様々な理由で流通できなくなった食品を無償で引き取り、フードバンク活動を日本で初めて開始した団体。「Food for all people（すべての人に食べ物を）」を目標に、活動開始から10年以上で多くの食品ロスを防ぎ、食料に困る人々の支えとなっています。

YKK 株式会社

黒部事業所 〒938-8601 富山県黒部市吉田 200 TEL:0765-54-8000 <http://www.ykk.co.jp>

パッシブタウン全景

企業活動のすべては【善の巡環】から

YKK が掲げる【善の巡環】とは？ 地元黒部や富山で、今最も注目されているまちづくり「パッシブタウン」への取り組みを通して、SDGs に通じる YKK 株式会社の理念を探りたいと、環境・安全グループ長村田康博さんにお聞きしました。

自然を最大限に活かす

パッシブタウンとは、自然エネルギーを最大限に活用するパッシブデザインを採用した次世代集合住宅です。黒部特有の「あいの風」と呼ばれる季節風や黒部川扇状地の豊富な地下水、その他にも太陽熱など、自然のエネルギーを活用し、電気やガス、石油などのエネルギー利用をできる限り抑え、快適な住環境を追求する持続可能な新しいまちづくり、住まいづくりに取り組んでいます。まさに、SDGs の Goal 11「住み続けられるまちづくりを」に該当する取り組みだと言えます。

きっかけは、東日本大震災

パッシブタウンに取り組むきっかけとなったのは東日本大震災に端を発した電力問題。

これを機にエネルギー消費量を抑制し、自然と共生する快適な住環境を追求しようというアイデアが生まれました。また、事業継続計画（BCP）の観点からも、本社機能を分散して黒部でできる業務は黒部に移そうという動きが出てきました。このため、東京から黒部に移り住む社員やその家族にとって住みやすい住環境を整備する必要があり、黒部のまちづくりへと構想が広がりました。

夏は緑陰、冬は陽だまりの街

黒部市内の社宅跡地を利用して、2025 年までに 6 街区約 250 戸の整備を予定しており、既に第 1～第 3 街区 117 戸の整備が完了。窓などの開口部による室内環境の制御や建物の断熱性能を上げ、自然エネルギーを最大限に活かし、いずれの街区でも北陸地域の一般的な集合住宅に比べ約 60% のエネルギー削減を目標としています。



異文化を尊重し、交流を楽しむ

パッシブタウン内にはハラール食に対応したレストラン、スポーツジムやカフェなどの商業施設も併設しています。タウンの施設や緑地を利用して毎月第 2 日曜日に「KAYADO! フリー」が開催され、まちの賑わいを創出しています。



上：ハラール食に対応したレストラン パッシブキッチン外観
下：レストラン・ミーゴレン

企業価値を育む【善の巡環】

その他にも様々な取り組みがなされていて、どの取り組みに関しても基になる考え方は、YKK 精神である【善の巡環】です。企業は社会や地域があるからこそ存続していける。事業を発展させた結果として取引先やお客様とお互いに繁栄できるような取り組みをすることで社会貢献につながる。このような考え方は、まさに SDGs につながる考え方だと思います。（蟹谷 慧：記）

SDGs未来都市 富山市 Toyama City



《住み続けられるまちづくり》をめざして

富山市は、平成30年6月に、SDGsを推進しようとする先進的な都市「SDGs未来都市」の一つに選定されました。このことを受けて策定した「富山市SDGs未来都市計画」では、2030年の目指す将来像として、「コンパクトシティ戦略による持続可能な付加価値創造都市の実現」を掲げています。これは、LRTをはじめとする公共交通を活性化させ、まちなかや公共交通沿線に人が快適に暮らしていくための「コンパクトなまちづくり」に取り組むことで、現在も将来も望ましい形で維持される(持続可能な)だけでなく、様々な新しい価値(付加価値)を生み出していくダイナミックなまちを表しています。

SDGsのゴール11「住み続けられるまちづくりを」は、富山市におけるSDGsの優先ゴールの一つです。



公共交通を軸としたコンパクトなまちづくり

市民や企業との幅広いパートナーシップで

また、SDGsのゴール7「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」の達成に向けて、太陽光や水力といったエネルギーを有効に活用し、災害が起こった際の非常用の電源や地域の交通として役立てるための取組みを積極的に行っています。

さらに、SDGsのゴール17「パートナーシップで目標を達成しよう」の達成に向けて、市民や民間企業・団体などと一緒に協力して、SDGsが国内外の地域や、あらゆる世代に広がるための様々なイベントや事業を行っています。

富山市では、市民が未来に希望を持ち、安全・安心して暮らしていくために、環境面に配慮するだけではなく、地域の経済や社会全体が豊かになるよう、これからもSDGsを推進します。



富山市の目指す都市創造のスパイラルアップ

G7 富山環境大臣会合開催記念

未来に繋ぐ 小学生植樹体験事業



G7富山環境大臣会合パラレルセッションの場で、イギリスの**ブリistol市**から報告された、『**One Tree Per Child**』を参考に、森林が持つ地球温暖化防止の効果を学び、環境教育の取り組みへの契機とするため、**市内の小学生による苗木の植樹体験事業**を創設。

事業期間：平成29年度から平成33年度まで(5年間)

対象者：市内の小学生 約4,000人

実施方法：宿泊体験施設「こどもの村」の宿泊学習に合わせて実施。

苗木1本を4～5人の児童で植樹。(5年間で全小学校が体験)

植樹本数：約1,000本(1.09ha)

平成29年10月11日(水)に第1回の植樹式を開催

「One Tree Per Child」とは

オーストラリアで始まり、イギリス・ブリストル市でも広く展開されている植樹事業。子どもたちによる1人1本の植樹を通し、人の成長とともに木々も成長し、環境に優しい人と環境に優しい自然の形成が図られる。



富山で SDGs がますます活発に

2018 年 6 月、富山の企業・団体・市民の有志で構成する SDGs 普及促進団体「環境市民プラットフォームとやま(PEC とやま)」が設立されました。以来、Web サイトでの情報発信やセミナー、フォーラムなどを複数回行い、累計 400 名を超える方々に SDGs についてお伝えして参りました。本冊子は、そのような中で関係のできた方々を中心に取材を進め作成したものです。取材中、他にも県内の学校、自治体、企業など様々な方面から SDGs の取組に関する情報が入ってきましたが、限られた時間と人員の中で、すべてを網羅することができませんでした。SDGs が 2015 年に採択され 4 年目を迎える 2019 年、富山県に着実に SDGs の波が押し寄せていることを実感しています。

SDGs はムズカシイ？

SDGs に掲げられた目標は、医療、福祉、公共サービス、社会貢献といった名目で、我々の普段の営みの中で既に当たり前のように行っていることが多くあります。SDGs は今までと何が違うのでしょうか。それは、複合的、広域的、本質的であるということです。日本の、富山の、この地での暮らしが、遠い国の人々の暮らしや資源と密接につながっている、未来の人達にも影響を及ぼす状況がある、自分と全く関係のない誰かの犯罪が、自分を含む社会全体で作り出す風潮によって生み出されている等々、複雑な関係性で成り立つ現代社会においては、1 つの課題を解決するにも、全体の関係性を見て、何が真の原因なのかを見極めて対応しないと根本的な解決にならない…。SDGs はそんな状況を踏まえて編み出された仕掛けなのです。

そんなフクサツな世の中は、私達一人ひとりにはどうにもできないのでしょうか？ 日々忙しく過ごす→余裕がなくなる→周囲への配慮が薄くなる… そんなことの積み重ねからこのような現状が生み出されているとしたら…？ そう考えると、まずやることはそんなに難しくないことかもしれません。「自分はいま本当に幸せなのか？」「何のために忙しくしているのか？」。一度立ち止まってゆっくりと周りを見渡す、そんなことが SDGs への入り口になるのかも知れません。



アースデイとやま 2018 での SDGs シールアンケート



PEC とやま設立記念 SDGs セミナー



幼稚園生への SDGs クイズ



小冊子編集会議

ライター紹介／編集後記

富山県立大学 4 年
黒瀧 春香さん

SDGs の活動だと公言していなくても、実は SDGs に関係している取り組みを行なっている人を紹介したいという思いがありました。小冊子を読んでもくれた人に『自分もこんな関わり方が出来るかも！』と感じて頂けたら幸いです。

今回の取材で、地方における SDGs への取り組みの重要性を知ることができました。地域社会について考えることが、結果として企業を成長させることにつながると感じました。この小冊子が多くの SDGs Action のきっかけになることを願っています。

金沢工業大学 3 年
蟹谷 慧さん富山大学 2 年
伊藤 拓也さん

私は群馬県出身で、南砺市のことは全く知らなかったのですが、エコビレッジ構想について取材をして、SDGs に積極的に取り組んでいるまちだとわかりました。コミュニティファンドなど、自治体としてのお話もとても面白かったです。富山市に続き、南砺市も「SDGs 未来都市」に選ばれてほしいです。

以前から「食品ロス」に強い関心がありました。今回の取材で、大量に発生している「食品ロス」の現状を打開すべく多くの人たちが活動している事を知りました。私も「食べ物を大事にする心」をしっかりと持ち続けていきたいと思います。

富山県立大学 2 年
加藤 哲朗さん富山県立大学 1 年
江川 竜平さん

今回初めて取材を経験し、聞き出すことの楽しさを実感できました。SDGs に対する考えや活動についてのお話を直接本人から聞くことで、言葉だけではなく内に秘めた情熱も感じ取ることができたと思います。今後の SDGs の活動に活かしていきたいです。